

## 琉球歴史の謎とロマン

2012年度 FUJITSUファミリー会 秋季大会 特別講演

歴史劇作家・プロデューサー **亀島 靖** 氏

**かめしまやすし** 1943年沖縄県那覇市生まれ。1966年早稲田大学第一商学部卒業。文化放送、ラジオ沖縄に勤務後、沖縄県商工労働部県民会館建設室企画課長、財団法人沖縄コンベンションセンター事業課長、財団法人沖縄観光コンベンションビューロー コンベンション室長、副館長を歴任。現在は、NPO沖縄県観光人材育成協会 理事長、てだこ市民大学 文化振興・教養学部学部長の要職にある。その他、テレビ番組の制作、出演など幅広く活躍中。『琉球歴史の謎とロマン』『琉球むらものがたり』など著書多数。



### 名前が語る琉球の歴史

私は、20年程前から琉球の歴史を沖縄からラジオやテレビ、文筆活動を通して伝えております。琉球の歴史は、有史以前より本土と深く関わり、強い結びつきを持ってきました。

まず、沖縄を知る入門編として、呼び名についてお話ししたいと思います。沖縄を表す言葉に「ウチナー」「琉球」「沖縄」がありますが、この中で一番古いのは、沖縄の方言である「ウチナー」です。沖縄の言葉は、奈良時代に本土の言葉が僧によって伝えられ変化したという説と、東南アジアのサンスクリット語が起源だとする説があります。ウチナーの「ウチ」は、東南アジアの言葉で「大きい」、「ナー」は「漁場」を意味します。8世紀に中国の唐から日本に渡来した鑑真和上の伝記にも、「ウチナー」と思われる表記が見られます。

次に、「琉球」という呼び名ですが、これは14世紀に中国との交易が始まった際に、中国の皇帝から賜ったもので、それ以降国名として使用されるようになりました。「琉」は「瑠璃」。ガラスのように光り輝く「球」のように美しい島であるという美称です。中国の海は、黄河や揚子江などの大河が流す大量の黄土のため、いつも濁った色をしています。一方、琉球の海は、世界でも非常に速い黒潮が流れ、透明度が高い海です。透き通った海に輝くサンゴ礁に囲まれた宝石のような島を見て、中国の人々は大変驚いたのでしょう。

中国から名前を賜った琉球王国は、明治時代になると廃藩置県により本土の中に組み込まれ、1879（明治12）年沖縄県となりました。それでは「沖縄」という名前がいつ生まれたかという点、実は江戸時代でした。江戸時代の初期に薩摩藩の支配下となった琉球では、国王が代わるたびに徳川幕府へ報告に伺う「江戸上り」という国家行事が行われました。往復に1年を費やす、100名を超える使節団の中には、琉球を代表する文化人たちも含まれていました。幕府の御用学者、新井白石は、使節団の名護親方と呼ばれる役人から琉球の話聞き、まるで「沖」に浮かぶ「繩」のように細い島であると表現します。これが、「沖縄」という名称の起

りと言われています。このように沖縄は、国名をとってみても、中国や本土と深い関わりを持っていたことがわかります。



### 「ウチナンチュ」のルーツとは

それでは、そもそも地元の方で「ウチナンチュ」と呼ばれる沖縄県民のルーツはどこからきたのでしょうか。日本人のルーツと言われる縄文人は、本土に約3万年前には住み始めていたようです。そして、沖縄に人が登場したのも約3万年前。つまり、日本の歴史と琉球の歴史の幕開けは、ほぼ同じ時期なのです。

沖縄本島南部の具志頭ぐしかみにある石切場で、1万8000年前頃と推測される人骨が発見されました。発見された地名にちなんで「港川人」と呼ばれるこの人骨は、最近の学説では、日本人のルーツである縄文人の祖先ではないかと言われています。沖縄の土壌はサンゴ礁が堆積したアルカリ性の石灰岩で、本土の火山灰の堆積である酸性土壌とは違い、人の骨が溶けません。したがって、1万年以上前の人骨の8割は、沖縄から出土しています。

では、港川人たちは、どのようにして無人島だった沖縄にやってきたのでしょうか。実は、2万年以上前は、氷河期最後の時代でした。地球が冷えると、海水が凍り氷山ができます。すると海水が少なくなり、水深の浅い海では海底が現れます。世界で最も浅い海の一つと言われる東シナ海では、中国や台湾、琉球列島、奄美大島、トカラ列島、九州を取り巻く海面が下がって、現れた海底がまるで橋のようにつながっていきました。最初は、ハブやヤンバルクイナ、イリオモテヤマネコなど沖縄固有となる動物たちが海底にできた道を渡ってくる。それを追って、中・大型の動物が移動してくる。そして、港川人の祖先が、マンモスなどを追って沖縄本島に渡り、九州へ上陸したのではないかとされています。これが、沖縄で発見された港川人が縄文人につながるとされる理由です。

アフリカに誕生した人類の祖先たちが長い年月をかけて、地球上のさまざまな土地に移動し、白人やアジア人、アメリカ先住民などの先祖になっていきます。沖縄に上陸した人々もその一部です。沖縄も日本列島も、このような壮大な歴史の動きの中に組み込まれているのです。



## 琉球と古代日本の結びつき

人々の移動に加えて、琉球と本土の関わりについての最近の研究では、弥生時代の初期に、貝文化で結ばれていたことが明らかになりました。古代より琉球では「サバニ」と呼ばれる小型の船で、九州との間を行き来していました。「ゴホウラ」という20cm程の大きな貝殻から作った腕輪を、米などの食料と交換するためです。当時、本土ではこの貝殻の腕輪1個が牛1頭と交換されたとも言われています。この琉球の近海でしか採れない貝殻の腕輪が、北海道の洞爺湖付近の遺跡や、青森県の三内丸山遺跡、佐賀県の吉野ヶ里遺跡の豪族の墓など2000年から3000年前の遺跡から発見されました。これにより、琉球列島と日本列島には、貝を運ぶ「シェルロード」があったと推測されています。海洋博公園の近くにある伊江島で貝殻の腕輪に関する遺跡が大量に発見されたことから、ここには貝製品を作る工場があり、貝製品を交易の品として大量に生産していたことがわかります。このように、非常に古い時代から、琉球と本土の間ではさまざまな交流が頻繁に行われていたのです。

しかし、沖縄の人々がどのようにして北海道に及ぶ遠い土地まで貝製品を運んだのかということに関しては、まだわかっておりません。琉球の海には「海の道」とも呼ばれる黒潮が流れており、九州までは黒潮の流れに乗って移動できますが、九州に上陸した後は、恐らくリレー形式で本州の中を北上していったのではないかと思います。このように琉球列島は、貝文化を基盤として、古代日本のさまざまな土地や中央政府と深く結びついていたのです。



## 琉球の歴史をつくった黒潮

琉球の美しい海と繁栄に欠かせないものに、黒潮があります。黒潮の源流は、遠く南太平洋で発生し、東南アジア、中国、そして日本へと北上してくるのです。そして、沖縄近海をなぞるように北上した黒潮は、トカラ海峡で四国沖を通り、静岡県、千葉県、宮城県と北上するもの、熊本県沿岸から玄界灘に入って日本海に北上するものに分かれます。黒潮には、マグロ、カツオ、ブリ、イワシ、トビウオなど豊富なタンパク源であるさまざまな魚群が回流しています。南太平洋に住む海洋民族は、この魚群を追って次々に琉球列島に住みつくようになります。これらの人々が、沖縄県民のもう一つのルーツと言われる海洋民族です。沖縄を表す最初の呼び名が「ウチナー（大きな漁場）」というのも、漁労を中心とした人々が名づけたからかもしれません。

沖縄が海洋民族をルーツに持つとされる理由の一つに、沖縄の神様は「ニライカナイ」と呼ばれる海のかなたから「水平」に来るとい説があげられます。それに対して本土の神々は、高天原から山に「垂直」に降りてきます。これは、その地域の人々に食をもたらすものが神だという考えからきているのではないかと思います。神様が海からやってくるのは、海の幸で生きる海洋民族ならではの発想です。さらに沖縄には、神社や鎮守の杜にあたる「御嶽」と呼ばれる聖域がありますが、ここに神様はおりません。

この神様は、祈りを捧げると海のかなたからやってくる来訪神で、さらに、女性にしかその意思を伝えません。ですから沖縄では、聖域は男子禁制です。国王といえども入れません。沖縄で女性が神聖な存在とされるのは、南太平洋の海洋民族に由来する母系社会の文化からきているのではないかと思います。

このように、黒潮という自然のエネルギーは、琉球の人々の交易を助けると同時に、外部からさまざまな人や物を運び、歴史を大きく動かしてきました。



## 琉球王国繁栄の秘密

中国との貿易が始まり、「ウチナー」が「琉球」という名前を中国より賜ったことで、琉球の歴史が新しい時代を迎えました。中国の皇帝が保証した国であるというお墨つきを得たことにより信用ができ、東南アジアなど海外との貿易が非常にしやすくなったのです。

さらに、琉球王国が繁栄したもう一つの理由に、元寇により中国と日本が国交を断絶していたことがありました。足利義満の時代になって、ようやく明との貿易が再開されましたが、琉球はそれ以前から中国に出入りすることを許されていました。このように、小さな島である琉球が、なぜ当時の中国から国として認められ、国名を賜り、貿易の権利を渡されたのか。それは、広大な中国でも採れない「硫黄」のためでした。中国の皇帝は大陸を支配するため、琉球からの硫黄を使って火薬を作り、独占していたのです。琉球は、火薬の材料である硫黄を貢物として中国へ届ける進貢貿易を行う唯一の国でした。それと引き換えに、琉球は中国から海外貿易を有利に行うことができる権利を与えられたのです。それが、貿易国家をつくるチャンスとなり、明治まで続く琉球王国という一つの国を繁栄させることになりました。

沖縄は、「キーストーン・オブ・ザ・パシフィック（太平洋の要石）」と呼ばれています。船の寄港地としてはもちろん、太平洋における軍事的に重要な沖縄の位置に初めて言及したのは、幕末に黒潮に乗ってやってきたペリー提督だとも言われています。大統領の交代によってペリーがアメリカに戻されなければ、沖縄の歴史もまた大きく変わっていたかもしれません。

このように、琉球の歴史と文化を見てみると、小さな島が独自に生み出したものはほとんどありません。人々や文明、文化、神々などすべてのものは、周りを取り巻く自然や外国からもたらされたものです。外部からのさまざまなエネルギーや情報を最大限に利用しながら、いかに発展してきたか。そして、琉球という存在が、日本の歴史の中いかに深く組み込まれ、さまざまつながりを持ってきたかということを知っていただければ嬉しく思います。

